∞∞

ニュースレター「がん１１０番」第39号　　　　　　　　　　　　　　　2010.3.20

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

∞∞

●井上さんの書籍紹介

「新・がん 50 人の勇気」
柳田邦男　著
文藝春秋
2009 年 12 月初版

はじめに
　私は、6 年前、滑膜肉腫というがんに罹かった。その時は、「死」は受け入れられなかった。亡くなられた方の闘病記も避けた。なぜか。それは、「死への準備」を行っていなかったからだ、と今改めて思う。「死への準備」とは、決してネガティブな思考ではない。裏返すと、残された自分の人生をどのように創るのか。著者の言葉を借りると、「死への準備とは、この世に生まれて一回限りのかけがえのないいのちと人生を、後悔のない内実の豊かにするために不可欠のもの」なのだ。私は、本書より、勇気をいただいた。紹介する。

著者の紹介
　1936 年生まれ。ノンフィクション作家。79 年「ガン回廊の朝」を発表し、第 1 回講談社ノンフィクション賞を受賞。その後も、この分野でも積極的に執筆され、その 1 冊が、本書の前作である「ガン 50 人の勇気」（81 年）である。90 年には、日本対がん協会賞を受賞されている。

本書の内容・感想
　まず、死への準備とはどういうことなのか、解説しよう。
『死への準備には、いくつもの段階（ステージ）がある。
　第一は、健康そのものと言えるような状態にある時でも、あるいは慢性疾患をかかえてはいるが差しあたりは死に結びつくおそれがない時でも、いつわが身にふりかかってくるかもしれない死に対して、自分はどう対処すべきかを考えておく生き方だ。ある日突然、脳梗塞に襲われ、車椅子の生活を余儀なくされた時、何を心の支えにするのか。あるいは突然、末期がんとわかったら、どうするのか。
　第二は、がんや難病が進行して、人生の持ち時間が 1 年とか 3 カ月しかないとわかった時、どのような医療機関の世話になり、どのように限られた時間を使うのか。思い残しのない旅立ちをするには、最低限何をすればいいのか。
　第三は、いよいよ死が目前に迫ってきた時、どのような最期を迎えたいのか。誰にそばにいてほしいのか。延命治療はどの程度まで希望するのか。自分にとって尊厳死とは、どんな条件を満たせばよいのか。どこに埋葬されたいのか。』　　－「死への準備」より－

　死への準備は、年齢に関係なくできることを、本書の中で、安芸郡府中町が故郷であり、29 歳で夭折した棋士、村山聖八段（没後九段昇級）が教えてくれる。5 歳の時、慢性の腎臓病、ネフローゼとわかった。この時より、死への準備が始まる。長い入院生活をしていると、同じ病棟の子どもたちの中には、死んでいく者もいる。そういう“病気の非情さ”を見ていれば、子どもなりに感性が鋭敏になり、“いつかは自分も”と思うようになる。「僕には時間がない。」
　中学 1 年生の時、親元を離れ、大阪の森信雄の弟子となり、17 歳でプロとなる。
　97 年、27 歳の時、血尿が止まらなくなり、“進行した膀胱がん”と診断された。手術をしな

ければ余命 3 カ月と告げられる。それでも最初は手術を拒否されたが、ようやく受けられる。但し、術後の抗がん剤治療は、断られた。薬の影響で頭がぼーっとなるのがいやだという理由であった。

98 年 2 月、NHK 杯トーナメントに出場。体調が悪く、長時間坐して指せる状態ではなかったが勝ち進み、決勝戦で羽生四冠と対戦。最終的に敗れたが、体調の悪さなど片鱗も見せず、最後まで粛然と駒を動かしていたのだった。

5 月になり、頻繁に高熱が出るようになり、広島市民病院に入院。がんの再発であった。

同年 7 月下旬のある日、父伸一さんと外出して繁華街を歩いた。本屋めぐりをした後、焼き肉屋に入った。病院では柔らかいものしか食べられなくなっていたのに、普通のご飯を注文した。伸一さんが「いいのか」と聞くと、村山氏は「僕は口から食べるのは、これが最後じゃないか」と言った。

最後に柳田氏は次のようにまとめている。

『八月八日午後零時十一分、村山氏は永眠した。二十九年しか生きなかったのに、万人共通の時間の尺度だけでは測れない凄まじいばかりの密度の濃い生きた証を人々の心の中に残して。』

自分の人生という物語を満足できる形で書き切ることができた、29 年という年月を自分の天命と悟り生き抜いた、といってよいのだろう。5 歳から死への準備は出来るのである、いや、しなければいけなかったのである。29 歳の青年が、私に、死に向かうかもしれない私に、勇気を与えてくれた。感謝する。

その他、本書には、1980 年から 2006 年までにご逝去された 60 余名が登場する。手塚治虫、いかりや長介など、すぐに顔が浮かぶ方もいる。柳田先生自らが丹念に目と耳で取材され、分析され、その後で、哲学的な思索を加えられている。先生の客観的であり、温もりのある記録が、人間はいかに生き、いかにして最期を迎えるのか、自分にあった生き方とは、など考えさせてくれる。ぜひ、手にしていただきたい。

最後に前作「ガン 50 人の勇気」より引用する。

『ここで一つ誤解されたくないのは、ガンというものを、助からない病気、死の不可避な病気ときめつけて、この作品を書いたのではないという点である。早期発見によりガンの治癒率が高くなりつつあることは、周知の通りである。にもかかわらずこの作品を書いたのは、不運にも病気が進行してしまい、「別れの時」が迫ってきた場合においても、絶望でなく希望と勇気を、しっかりと手にし得る道があるのだということを示してくれた人々のことを、記録しておきたかったからである。』

会員　井上　林太郎